ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　背中に添えられた手の暖かさが、気が付けば俺の視力や聴力を取り返してくれていた。

「うちの……」

　それが分かってから一番最初に聞こえたのは、誰かの声だ。でも、俺の体を支えている奴じゃ無い。

　一体、誰だろう？　そう思った次の瞬間には、答えが分かった。

「ロランに、何してんじゃぁあいっ！」

　レイだった。雄叫びのような声を上げながら猛スピードで突っ込んで、あいつに斧槍を振り下ろしていた。

　あいつはカイザーナックルでレイの攻撃を防ぐ。ガインという重低音が辺りに響き、二人はそのまま押し合いを始める。

　武器は違えど、それはまるで、刀同士の鍔競り合いのような迫力を醸し出していただろう。

「ロラン！　ロラン！　大丈夫ですかっ？」

　そして、今にも泣きそうな声で俺に呼びかけるのは、詠だった。俺を支えているのも詠だ。

　前に風呂場で見た時の、あんなに細い腕で、よくもまあ俺の体を支えることが出来たものだと、この時そう思っていた。

　そんな場合じゃないのにな。

　俺はもう、終わりかもしれない。戻ってきた視力が、再び揺らいでいく……

　それでも俺は、目の前の光景を見ていた。

「お前は……さっきの……？」

「あら、私のこと知ってんの？」

　押し倒そうとする力を一切弱めることなく、レイは頭に『？』マークを浮かべる。

　レイはこいつを見たことが無いから、その反応は普通だろう。

「……遠くから見ていた。ロランと戦いながらな」

「ん？　あんた……なんでロランの名前知ってんの？」

「いや、あんた。さっき叫んでたじゃねーか……」

「あっ」

　それが、決定的な隙につながった。間抜けな声を上げたレイの斧槍に込めた力が、ちょっとだけ緩んだのだ。

　その一瞬をこいつは逃さなかった。勢いよくレイを突き飛ばし、そのまま拳を振り上げ、地面を蹴る。

「悪く思うなよ！」

　そのままレイを殴り倒そうとした、その時だった。

　打ち出された拳がレイの体に直撃する直前、その腕が爆発したかのように明後日の方向に吹っ飛んだのだ。その腕に体勢を持って行かれ、こいつはバランスを崩す。

「くっ……しまった！」

「あんがとー、樹葉ちゃん！　愛してるぅ！」

　どうやら樹葉が、遠くからこいつの腕を狙い撃ちしたらしい。

　こっれによって出来た隙をついて、レイは斧槍を頭上に振りかざした。

　だが――

「ふおぅりゃぁあっ！」

　やや気の抜けるような叫び声が聞こえてきたかと思えば、瞬く間にレイが今まさに振り下ろそうとしていた斧槍があらぬ方向へと飛んでいく。

　よく見れば、取っ手のところに何かが絡みついていて、俺はそれに見覚えがあった。

「トーゴ！　大丈夫っ？」

　俺が最初に戦っていた、鞭使いである。

「え……援軍……って、あんた、さっきのっ？」

「ふふふ！　先程はどうも。リベンジしにきたよぉっ？」

「詠ちゃん！　ロラン連れて、ここから今すぐ離れて！」

　慌てたような顔をするレイの声。

　そんな中、

　だんだんと遠くなっていく俺の意識が最後に焼き付けたのは、今まで後ろで支え続けてくれていた詠が、俺をお姫様抱っこをしてその場所から逃げ出すところだった。

　暗闇の中、俺は独りだった。

　誰もいないこの場所で、何も無いこの場所で、俺はただただ呆然と、立ち尽くす。

　ふと、囁き声が聞こえた。

「足手纏い」

「いらない」

「邪魔」

「裏切り者」

　次々と繰り出されるそんな言葉に、俺は諦めたように目を伏せるだけ……

「可哀想な子……」

　だが、最後の悲しそうな一言が俺を――

「……っ」

　痛みで、目が覚めた。

　なんか体がだるい。だるいと思ったら、俺の体に何かがのしかかっているようだ。

　そしてそれとは関係なしに、体中が痛い。そりゃあそうか。『』とＰＴＳＤで、俺は倒れたんだからな。

　こういう時って、目が覚めたらその前の記憶はあやふやだったり、そもそも記憶がなかったりするものだと思ったが、俺はそんなことないらしい。目が覚めた瞬間から、あの日の事が繰り返し繰り返し再生されていた。血が流れる場面が脳に浮かぶ度に、目眩と吐き気が襲ってくる。

　そのイメージを、俺は無理矢理に押し沈めた。

　そういえば、ここは……？

　背中や腰は、何か柔らかいもので包まれているような感覚がして、やけに心地良い。しかも身につけているのは、見慣れた自分のパジャマだ。

　ぼやける視界が写しているのは、白い天井。どうやら俺は仰向けになっているらしい。蛍光灯は端っこが黒ずんでいて、そろそろ替え時な事を示している。どこかで見たことがあるなと思ってたが、すぐにここが自分の部屋だということと、俺が自室のベッドに寝かされていることに気がついた。

　ふと、チュンチュンという音が聞こえる。気が付けば、夜は明けていた。時計を見れば、デジタルの文字は六時三分を表していて、その横に写し出されている文字は『水曜日』だ。

　微睡む頭で計算すると、どうやら俺は一日以上寝ていたらしい。

　それでもまだ体が痛むのか……

「もっと、鍛えないとな」

　そう呟いた声が、軽い頭痛を引き起こす。口から漏れ出た音も、少し掠れていた。

　そんな自分が情けなくて、悔しくて、俺は無意識に布団の中で拳を握り締めていた。

　そういえば、さっきから何やら重い。掛け布団にしては重すぎるだろう。しかも、なんか硬い。これは、まるで人の……

　俺は体が痛むのも気にせず、起き上がった。

　掛け布団がペラリとめくれて、それ……いや、『そいつ』の顔を隠す。

　よく見れば、周りに他にも人がいた。俺と同じく、見慣れたパジャマの姿で。

「……」

　暫く無言でそいつ等を眺めた俺は、ゆっくりと顔に被さっている布団をどけた。

「目が、覚めたようだな」

　その時、タイミングを見計らったかのように俺の部屋の扉が開く。ようやくはっきりとしてきた視界が捕らえたのは、マルクスさんだった。手に持っているおぼんには、形の悪いおにぎりが六個。

「偶然だ。狙って入ってきたわけじゃねえ」

　俺の表情から何を読み取ったのか、いつも通りの仏頂面を少しだけ緩めてマルクスさんは言う。

　マルクスさんは俺の部屋の机の上におぼんを置いて、椅子に座った。俺が使っている椅子は、マルクスさんには小さすぎる上に、耐久性とかそこら辺も危ないらしく、キリキリと苦しそうな音を立てている。

「……少し前までは起きていたんだがな。流石に疲れたか」

　マルクスさんが、俺の体の上に頭を乗っけている奴等を見て、そう呟いた。

そいつ等は、すやすやと寝息を立てていた。

　俺の右側でだらしなく寝ているのはレイ。腕を枕に訳でもなく、掛け布団の上に頭を乗せていた。そのせいか、現在進行形で垂れている涎が布団にシミを作っている。半開きの口から息が漏れるたびに、ワンサイドアップに括られた麦わら色の髪がピョコピョコと揺れていた。

　俺の足元で、レイとは対称的に行儀良く寝ているのは詠。椅子の背もたれに寄りかかって、船を漕いでいる。偶に口がゴニョゴニョと動いているが、どうやら寝言のようだ。一体、どんな夢を見ているんだか。

　で、右横で突っ伏しているのは樹葉。突っ伏してはいるものの、レイとは違ってきちんと腕を枕にしていた。俺が重いと感じていたのは、彼女が俺の腹の辺りに顔を埋めていたからのようだ。まさか彼女がこんなことをするとは思えないので、多分気がついたら寝ていた、といった感じなのだろう。

　チームメイトの三人だった。

　まるで泥の中に沈んだように眠っていて、暫く起きそうにはないように思える。

「こいつ等はな、学校も休んで、ずっと付きっきりだったんだ。昨日丸一日、目を覚まさなかったお前を案じてな」

「あの……」

「気になるか？　一昨日のこと」

　俺はマルクスさんの問いに頷く。確かあの場には、『トラース・ブレイカー』の連中が五人はいたはずで、勿論全員倒す余裕など無かったはずである。あそこからどうやって逃げ切れたのか、気になったのだ。

「その三人には、昨日話してあるんだが……まずは、謝らせてくれ」

「……？」

　突然頭を下げたマルクスさんに、俺は目を見開く。何も言えないまま、次の言葉を待っていたのだが、暫く無言のまま時間が過ぎ去っていった。

「何がですか？」

　沈黙に耐え切れなくなって、先にそれを破ったのは俺だ。

「……いや、一昨日の任務の事だ」

　重苦しそうに、俺の問いに答えるマルクスさんは、かなり言葉を選んでいるようだった。

「あの任務なんだが……本来は、別の、もっと実力のあるユニットに任せるはずだったんだ」

『ユニット』というのは、『ワルキューレ』内の、個別のチームみたいなものだ。まあ要するに、俺達四人のグループを含む、他の同じような人達の集まりみたいなことである。

　『もっと実力のある』ということは、俺達の先輩に任せる予定だったのだろう。

「それが、どういう訳か、お前等のところに任務のメールが送られてしまったようなんだ。今までこんなことは無かったんだが……」

「手違いだった、という訳ですか？」

　そう聞くと、マルクスさんは頷いた。

　まあ、確かに少しおかしかったかもしれない。規則的に見れば、本来は俺達のところに任務のメールなぞ来なかったはずなのだから。

　不思議と、怒りは無かった。

「怒らないのか？」

　マルクスさんも同じことを疑問に思ったのか、俺にそう尋ねてくる。

「……いえ」

　そう言うと、マルクスさんの眉がピクリと動いたのが見えた。

「……何故だ？」

「……自分でも、ちょっと分からないんです。ただ、別に怒ってるわけじゃないみたい、というか……寝起きだからですかね？　そこら辺が、ちょっとはっきりとしないんですよ」

　どう言えばいいか迷った俺だったが、素直に感じたことを口にしてみた。それを聞いて、いまいち納得のいかなさそうな顔をするマルクスさんだったが……追求はしないことにしたらしい。

　代わりに、話題を変えた。

「そう言えば、色々と聞いたぞ？　ロラン、お前さん、負けちまったみたいだな」

　そう言われて、俺は無言で頷くしか無かった。思い返せば思い返すほど、何の言い訳も出来ない、完璧な敗北だったのだ。

　攻撃は通らなかったし、その上あいつの攻撃はかなり効いた。時間の感覚も無くなっていたので、レイが助けに来てくれなかったら、俺は無様に地面に伏していたままだった。

「あの、マルクスさん。あの後、どうなったんですか？　俺達、どうやって助かったんですか？」

　それでも、これを聞いてしまったのは、俺がその事実から目をそらしているからなのだろうか？

「結果的に、俺達『ワルキューレ』の物資は全滅しちまった。また新しいやつを探さねえと……」

「そうですか……」

　それを聞いて、俺は深く息を吐いた。

「で、お前等だが……お前等にメールが届いてしまったという知らせを受けて、真っ先にそっちに向かったのは『ファルシオン』、俺達のユニットだ」

「……っ！　すいません」

　慌てて俺は頭を下げる。

　俺はその言葉で悟ったのだ。あの任務は、例え手違いであったとしても、俺達の、特に俺のあれは酷すぎた。

　俺がもう少し冷静だったら、少なくとも物資は守れたかもしれない。俺達が例え実力不足でも、全力で、いつも通りにやっていれば、最低限の働きは出来たはずなのだ。それで駄目なら、また別の考え方もあったかもしれない。だが、今回は違う。

　物資が全滅させられたのは、俺の責任だ。あいつを見ても、平常心でいれば済んだ話である。

　感情のままに動いてしまった挙句、あいつに負けたのは俺のミスだ。

　加えてその尻拭いをマルクスさん達にやらせてしまったことに、俺はこうして、彼に頭を下げるしか無かった。

「……」

　てっきり、俺はマルクスさんに怒鳴られるかと思った。そこら辺の諸々はレイ達が報告しているだろうから、『たるんでる！』とか『鍛錬が足りん！』と言われても仕方無いだろう。

　だが、いつになってもそんな声は聞こえてこなかった。

　代わりに、俺の頭上に鋭い痛みと、重いＧがかかる。

「……っ？」

　訳も分からない中で、俺はようやく、マルクスさんに拳骨を落とされたことに気がついた。

　脳まで痺れるような痛みを抱え、頭を両手で抑えながら、俺は目に溜まった熱い液体がこぼれないように慎重に、ゆっくりと顔を上げる。

　何やら複雑そうに顔を歪めたマルクスさんが、俺のことを見つめていた。

　てっきり、怒鳴られる代わりのこれかと思ったのだが、その目を見て、俺は多分その考えが間違っているのだろうと直感する。だが、だからといって、何故自分が殴られたのか、俺には分からなかった。

「それは……」

　驚く程低い声が、マルクスさんの口から発せられる。

「それは、俺に言う言葉じゃねえだろうが」

「えっ？」

　マルクスさんの言った言葉の意味が、俺には理解出来なかった。

　彼に謝罪せずに、一体誰に謝罪すればいいのだろう。

　理不尽な行為と言い分に、俺の中で黒い何かがフツフツと煮えたぎっていく。

　疑問と怒りが、俺の心を支配していった。

「そんな……こと、言ったって……」

　思わずついてでた言葉に、怒気が含まれていなかったといえば嘘になるだろう。

「お前が真っ先に謝らなきゃならねえのは、こいつ等三人に対してじゃねえのか？　一番迷惑をかけたのは、危険にさらしたのは誰なのか、ロランよ。おめえは本当に分かってんのか？」

「そりゃあ……後で三人には謝りますけど……！　だって、マルクスさん達にも迷惑をかけたじゃないですか……っ！」

「俺達に迷惑？　そんなんかかってねえよ。さっきも言っただろうが。あれはこっちのミスだって」

「でも、俺がもっと上手くやっていれば……」

「あんな突然の状況で、『チーム』に入って二年ちょいしか経ってないひよっ子に、上手くやれなんていう方が無理な話だろうが。そういう意味で、『もっと実力のあるユニットに』って――」

「それでも――」

「いい加減にしろ！」

　ついに、マルクスさんが大声を上げた。静かな部屋のせいで、驚く程良く響く。

「……ほぇ？」

「……ぁれ？」

「……っ？」

　その音は、眠っていて暫く起きそうもなかった三人を、起こしてしまった程だ。

　三人は一瞬、起きている俺の姿を見て顔を明るくさせたが、同時にそんな状況ではないことにも気がついたようだった。俺とマルクスさんを交互に見て、開きかけた口をどうすればいいのか困っているようにパクパクとさせている。

「あぁ……わりぃな」

　起きてしまった三人に、バツの悪そうな顔を作るマルクスさん。咳払いを一つして、改めて俺の方に向き直った。

「おめえはよ。何で俺が怒ってんのか、分かってんのか？」

　それが分かれば苦労しない。俺はそう思いながら、マルクスさんから目をそらした。

　俺が悪いのなんか、分かっている。反省もしている。だからこうして謝った。

　なのに何故、怒られなければならないのだろうか。

　そんな俺にマルクスさんは溜息を吐いた。

「……話は変わるがよ、ロラン」

「……なんでしょう」

　ぶっきらぼうに言い放った俺だったが、次のマルクスさんの一言で、飛び上がらんばかりに驚いた。

「おめえの『ヘブンズ・ギア』と『ヘルズ・ギア』だが、暫く預からせてもらうぞ」

「――っ！」

　思わず、そらした目を再びマルクスさんに向けていた。

　周りの三人も、声には出さずとも、はっきりと驚いた顔をする。

「預からせてもらう……って、つまり没収ってことですかっ？」

　俺達四人が声を失った中、最初に取り戻したのはリーダーのレイだ。

　彼女の質問に、マルクスさんは頷く。

「そんな……なんでっ？」

　続く俺の質問に、マルクスさんは首を横に振るだけで、何も答えてはくれない。

　彼は壁にかかる二本の刀を手に取ると、俺達が抗議の声を上げる間も与えず、部屋を出ていこうとした。

　だが、出て行く直前に、立ち止まる。

「ロラン。俺が何で怒っているのか分かったら、取りにこい」

　背中を向けたままそう言って、マルクスさんは今度こそ部屋を出て行った。

　そして後に残るは、静寂のみ――